

---

# trapezoid 時空を架けて

莉杏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

trapezoid

時空を架けて

### 【Zコード】

Z9082X

### 【作者名】

莉杏

### 【あらすじ】

いたつてふつうの高校2年生「玲南」は、毎日、担任である数学教師「優紀」とお昼ごはんを共にする。

そこには、それぞれ玲南と優紀が抱える問題があった。  
周りからは見えない、人間の抱える闇や葛藤。

そして2人は、現実とは隔離された空間へ引きずり込まれてしまう。

そこで出会った仲間とともに、自分の闇を光に変えることができるのが。リアル×ファンタジー 完全オリジナル作始まる！



## あの人との出会い（前書き）

つたない文章ですが、読んでください。たら嬉しいです

## あの人との出会い

trapezoid：不等辺四角形・またの名を凹形といつ。

あしたちの住む世界は、狭い。

「ねえ、レナ。知つてる？」

「何を？」

「俺らの生きている世界つて、ほんとほんとすり抜けちりやいんだよ」

あたし、カラサワ唐沢玲南レナ。関東のちよつと田舎(?)に住んでる高校2年生。

両親と妹、弟とふつーに暮らしてます（笑）

親友の芽衣からは「玲南はA型に見えるツー」とて言われてるけど、B型です（（+）（+））

キーンコーンカーンコーン…

やつと4時間目終わった…。教室は一気にざわめき始める。机をガタガタ移動させ、「こつめん」で集まつて各自お弁当を広げる。

「焼きそばパンゲット…………」と騒ぐ男子。

いつもと何ら変わらない。

そしてあたしは、席をたつた。

両側に並ぶ教室のにぎやかな声を聞きながら、廊下を歩く。

第一校舎の1Fすみつこ。第一多目的室があたしの居場所なんだ。ドアを開けると、ヽヽいた。

身長158センチのあたしよつこよつと高こ田線。黒くてつやの

ある髪。グレーのシャツに、青いチェックのネクタイ。

「よお シナ。」

右手のお弁当箱の包みを少し持ち上げて、彼は言った。

彼はこの学校の数学教師。と、言つとそこらのケータイ小説のようだが、あたしはこの人に恋愛感情を注ぐ気はさらさらない。だいいち、若干25歳の彼には、寄つてくる女子が山ほどいるわけで、彼は恋人候補に苦労しないってわけである。

「今日は、晴れたな。」机でお弁当をひろげる先生。

「うん、そうだね。……昨日の雨、すこかつたもんね。」向かいに座るあたし。

「レナ、チャリで「ケなかつたあ？」卵焼きをかじる先生。

「「ケないよっ！ 芽衣じやあるまいし！」反論するあたし。

「ああ、早瀬は派手にやつてたな～」お茶のペットボトルに手を伸ばす。首から下げたネームホルダーが揺れた。タカトウユウキ高搭優紀

今のおたしの担任。

「…食べる？」先生がからあげを田線の高さまで上げる。

「…ううん、いい。」いつもと同じやりとり。何ら変わらない。

これが、あたしの教室でお皿を食べない理由。  
食べない、んじやなくて、食べられない。

「そつか。…美味しいのになあ。」からあげをほおばる先生。

あたしは、窓の外に田をやる。テニスコートの奥の林が、色づき始めていた。

彼と畠と一緒に過ごす日々になつて、早いもので一年半が過ぎようとしている。

先生との出会いは、あたしが高1の頃。

お昼休み、クラスに居場所がないあたしは、毎日4時間目が終わると校舎の影にある中庭のコンクリートに座つて、アイポッドで音楽を聴いていた。

めつたには通らない。だからアイポッドを使っていても気付かれる心配がないのだ。

ただ、寂しいだけ。

お昼休みが終わるころ、芽衣が迎えにくる。

あの日も、いつものように音楽を聴いてたんだ。

「…つツ！？」

突然、誰かにヘッドホンを取られ、振り返つた。

「あ、いけないんだ」「そこに、彼がいた。

「あ、あの、」校則違反がバレたと思い、とつさに手を伸ばすも、後の祭り。

「1年4組 唐沢玲南さん? こんなところで何たそがれてるのかなあ?」

不敵な笑みを浮かべる先生。

「なんで、あたしの名前?」

「唐沢さん、うちのクラスの矢島の友達でしょ。何度か見かけてたし。」

「ああ、そうだった。同じ中学の 矢島実緒やじまみおは家の方向も一緒で、2人で帰ることもしばしばだ。でも、先生はあたしのことなんて知らないと思ってた。

「お弁当は? 昨日も食べてないみたいだったけど。」

「昨日も?」

「あ、昨日つていうか、先週ぐらいかりやつと？」  
「見てたつてこと？」

「いや、だつて俺の弁当食べるところから丸見えですから。」  
「はあ、ヽヽ。」

知らなかつた。

「もしかして、いじめ…とか、ヽヽ？」 おずおずと聞いてくる  
先生。

「違うよー」

「…ほんとに？」

「うん。ほんとだつてば！友達もいるし。」 笑うあたし。  
まあ、そう思われても仕方ないか。

「ま、なんかあつたら、相談のるし」アイポッドをよこし、渡り  
廊下を戻つて「う」とする。

「取り上げないの？」

「なんか、さびしそーだつたから。」 笑いを残し、ドアの向こ  
うに消えた。

それからちよくちよく、先生は昼休みに会つてこくつになつた。

そして、このこのからだ。

あたしが夜、おかしな夢を見るよつになつたのは。

「最近ねえー、変な夢見るんだよね。」

いつもと同じ第一多田的室にて。今日の先生の昼食はパンビニ

のパン。

「へえー。毎日？」

パンを開けながら先生は聞く。

「ううん、なんかね、たまーになんだけど。すうじにリアルなの

！」

「それってどんな夢？」

「ほら、パンぐず」ぼぼしてゐよー！」

「ううん…なんだろ、現実そのものって感じ？」

「ふーん。」

夢つてわからないくらいに、リアルで、鮮明。

そしてなぜかあたしは14歳つてことになつている。

3年前だから今とそんなに変わらなくて、身長が少し低くなつた  
くらい。

でも、意識がはつきりしてて、自分の意思で動ける。  
場所は、、、よくわからない。

なんだか、懐かしくて少し怖いとこ、、、。

「その夢に玲南以外の人つて出でくんの？」

…あと6分で休み時間が終わる。

「うん。いつも同じ子。」

「子？」

「17歳なの。シグマって名前の男の子。」

「シグマ？それ、名前？玲南、シグマって何か知ってる？」

「え？知らないよ。だつてその子が言うんだもん。」

先生の囁つきが心なしか哀しそうに見えるのはなぜ？

「シグマは、数学記号。総和を意味するんだ。まだ習ってない  
よね。」

「わっすが、数学教師！」あたしは笑って見せる。

「まあね。…あ、授業だ。玲南。」先生も笑ってみせる。

また、夢をみた。

「シグマ、ねえ！ シグマつたらー！」

夕方のどこかの狭い路地。  
息が上がる。

「遅い。ちゃんとついて来ないと道に迷うだ。」シグマが言つ。

黒い髪に、少女を思わせるぐらし髪に掛けた

特別美少年というわけではないが、なかなか可愛らしい顔立ちを

「だつて…ビル、行くの？」

息も切れ切れのあたし。  
なあんで、夢のなかでこんな疲れてん  
の、、、？

「俺たちの仲間がいる場所だ。」

「仲間。 時の迷い人つてことかな。」 ふつ、と笑みを見せた。  
「この横顔を、玲南はなんだか懐かしく思った。」

「！お姉ちゃん！いい加減起きてよっ！」  
バサッと何かが落ちてきた。

大量のぬいぐるみと枕。

しかめつづらであたしを見下ろしているのは、妹の春南はるなだ。

「もうー、お母さん仕事に行つねやつたよー、あたしも朝練あるから！」

春南は中学1年生。

吹奏楽部に入ったとやらで忙しいらしい。

「もうちょっと寝かせてくれたつていにじやん泣」

「だーめ！ 朝あさはんは食パンだつて。あつ！ もう行かなきやあー！」

「いってら~」

いつもの朝。

あつ！ あたしも時間やばつ！

昨夜の夢が、もやもやと頭をかすめた。

その日、急に職員会議があるとかで、あたしは久しぶりに昼休みを中庭で過ごした。

芽衣はいつもいよいよって言つてくれたけど、あたしはそれを断つて、中庭にいた。

でもそれはすぐに間違いだつたと気付いた。

中庭は校舎の間の風が吹きさらしていて、とてもじゃないけど25分間も耐えられなかつた。

教室に戻ると、芽衣たちはトイレに行つたのか、教室は黙つたり人がいない。

ただ、いつも実績たちのグループにいる葵という女子がいた。

あたしは、この子が苦手。

小柄で色が白く、おとなしい。

でもいつもグループから外されることがない。男子にも人気が

あるようだ。

あたしとは大違いで、とにかく、ついやましかつた。

放課後、あたしは図書室にいた。

プレハブ校舎のせいで、やけに湿気すごい。

でも、暇をつぶすにはもってこいだ。

あたしは、帰りのスクールバスを待つ間にたびたびここに通つていた。

時計が4時30分を指した。

荷物を取りに、2階のいちばん奥、2年9組に向かう。

夕日が差し込む教室。

ドアを開けようとして、ハツとして手を止めた。

教室には人がいた。

窓に重心をかけて寄りかかり、外をぼんやり見つめる人影。

・・・先生だ。

微動だにしない。

あたしは、動けなかつた。

外を見つめる先生の目が、あまりにも哀しげだつたから。

結局、あたしはまた図書室に逆戻りするほかなかつた。

その夜、また夢を見た。

路地裏の小さな建物。 中はカーテンのような布が何枚も下がつて、壁のようになつてゐる。

シグマがそのうちの一枚を持ち上げ、中に入った。  
あたしも後につけぐ。

なかには、6畳ほどのスペース。

そして、床に座つたまま玲南を見つめる4人の姿があった。

夢じゃなかつたっけ？

玲南は、ふと、我に返つた。

「…これ、夢だよね？」

わけがわからない。「こんな精巧な夢、見たことない。

「違うよ。」シグマが言つ。

「だつて、ヽヽヽええ！？」シグマとほかの4人もこいつら人の姿は見飽きているらしい。

「玲南、よく聞いて。」

シグマがこっちをまつすぐに見る。

透き通つた茶色の瞳。

「つてか、そもそもなんであたしの名前つ…」

「落ち着いて。おれたちはみんな同じだ。」

「？？？」

「閉じ込められてるんだ。」

シグマは真剣だった。

「夢だよ！　すぐに覚めるし…」反論するあたし。

「無理だよ。俺たちはここから出るためにいろいろ試した。何回も何回も。でも、すべてダメなんだ。ここは、現実とは違う。」シグマが言つ。

「嫌！　やだやだやだ！　ここはバーチャルつてこと？　そんなのありえない！」

「ありえるんだよ！ 現に、俺だつて信じられないんだ！ まさか、夢にとりこまれるなんて、、、、。」

シグマは口を開いた。

そこではじめて、あたしは周りを見回した。

ちちぶ台のようなテーブルを囲むように座っている4人。ぱっと見た感じは、ふつうの人みたい。

あ、でも左から2番目の女の子は見たことがあるよ！な…？

「とりあえず、自己紹介だ。」 シグマは冷静だ。

「誰からやる？」 シグマの隣の少年が尋ねる。

「やつぱシグマからです。」 見たことある少女が笑って言つた。

「仕方ない…。俺はシグマ。17歳…ってことになつてゐる。よろしく。」

無愛想ながらの自己紹介。

「私はミハ。15歳。好きな食べ物はチョコレート…よろしくねっ！」

ガーリーな感じの格好で、栗色の巻き髪がかわいい。

1番小さい女の子。少女にそつくりの人形を抱えている。

「…コトコト。」

「ほらコト。 もうとしゃべれ。 いくつ？」

隣の少年がコトコトの頭を撫でる。

「……。4さい。このこ、あかり。」  
人形をの服をいじりながらそれだけ言った。

「はーい！ 次は俺！ アイト、17歳。好きなスポーツはバス  
ケ！ よろしくなつ」

人なつっこい明るい笑顔。 いかにもクラスの人気者つて感じだ。

「はい！ 次は君の番だよ！」  
アイトがあたしの肩をたたく。

「、、、 唐沢 玲南です。16歳です。よくこには夢で見てて  
。あの、まだよくわかんないけど、よろしくお願ひします、、、。」

「

ぱちぱちと小さい拍手が起きる。

「玲南。今の自己紹介でわかったと思つけど、こには名字とか、  
本名は使えない。禁止されてるんだ。」シグマが言つ。

「今から、玲南に名前をつける。」

「どうやつて…？」

「ミル。 玲南に名前をつけられる？」  
驚くミル。

「わ、私、、、？」

「そうだ。 女同士だし、玲南もそのほうがいいだろ？」

「玲南もそのほうがいいだろ？」

「わかった。ええと、。。」

ミルはあたしをじいっと見つめた。

あたしも、ミルを見つめた。やつぱりどこかで見た」とあるんだよね…。

「決めた！」

ミルが言つ。

「ララ。同じRの音が入つてゐし、ほらそのストラップ、、、！」

あたしは、そのとき初めて自分の格好を見た。  
紺のパフスリーブのトップス。細かいドットが散つてゐるキュロットにトレンド。

日本の一般の女子高生が好むスタイル。

そしてなぜかキュロットのベルト部分に、「あの」ストラップがついていた。

2週間前、先生がくれたストラップ。。。

小型のクレーンゲームでたくさん落ちてくるようなものだが、あたしは嬉しかつたんだ。

ゴム製の樹脂で作られたカップケーキのフュイク。

先生は言つた。

「玲南が昼飯をちゃんと食べられますよつて。」

フュイクの側面には「LaLa sweet」とロゴが入つていた。

「どう? ララ。」

ミルが不安そうに聞く。

「いいじゃんララ！ 可愛いよー。」

アイトがはしゃぐ。

「どうだ？」 ヒシグマ。

「うん！ 嬉しい！ ありがとう。ミル。このストラップ、大事な人からもらつたものなの。」

…一瞬、シグマが驚きの目でこっちを見た気がした。

## 「あたしたち」の場所

シグマ・ミル・アイト・「トコ。…そしてあたし、トコ。みんななり日本人離れした名前だけビ、どうやらトコは日本人らしい。

タイムスリップといつわりには、時代ビリバカ田付も現実と変わつていいない。

つまり…？

「ねえ、あたしたちつて瞬間移動してるので」と。

「いや？ そんなことはないはずだよ？」 アイトが叫ぶ。

「トコは、日本の地図には存在しない場所なんだ。」トラペゾイド。それがこの世界の名前なんだ。ここには、何らかの理由で集められた人々が暮らしてゐ。俺たちみたいにね。」

「ど、ど…？」

「トコペゾイド。不等辺四角形のことだよ。」

「？？？」

「ほり、この家の前の坂をずーっと上つていいくと丘があるだろ。そこから見えるこの街がでっかい丘形の形してゐからなんだつてさ。」

手に持つたお盆をテーブルに置く。

「へえ～。アイトたちが、もつじて来たの?」

「んー。俺は「」の家の中では一番最後に来たからなあ。初めて「」の獣を見てから2年は経つかな。」

「じゃあ、ほかのみんなはもつずつと「」に閉じ込められてるんだね…。」

「ララ、なんか勘違いしてるかも。」

「えつ」

「俺たちは閉じ込められてるんじゃなくて、「」に来てるんだよ。」

「さじせ、5つのロップにオレンジジュースを注ぐ。」

「えつ? でも…」

「シグマはあんな風に言つけど、俺は閉じ込められたとは思つてないさ。あ、ララもオレンジで良かつた?って、もう遅いけど(笑)」

「うふ。 来てるって、帰れるってこと?」

「帰れるよ。ただし、自分の意思じゃ無理だけどな。まあ、ララもその「」の世界のシステムがわかつてくれるよ。おーい。ミル、」

「アーッ…」

「やうかなあ…」

「アイテム呼ばれ、表からミルとロップが入ってきた。」

手にもつた袋にはドーナツが入っている。

「見てみてうーーー。隣のコキさんからもうつりやつたーーー。  
ミルが袋のドーナツを一つ差し出した。

「あ、ありがとう…。コキさんって？」

「ああ、ここに隣に住んでるおばあちゃんなんだよ。二つも私たちに  
渡してくれるので。あれ、シグマは？」

「あーシグマつちなら中央タウンに…あ、帰ってきた。」  
アイトは早くもドーナツにぱくつっこむ。

「シグマ もびーぞつー！」

ミルがドーナツをシグマに渡す。

「コトコトもーーー！」 甘えた顔でミルの足にじがみつづコトコ。

「コトちゃんにもあげるね。」

「おーおー、そんな顔しなくてもドーナツはなくなんないよ（笑）」

アイトがコトリを抱き上げながらなだめる。

コトリは座つてこのあたしをアイトの肩越しに見つめ、

「うーーー！ アイトはコトのものだからねーーー！」 と、なぜか勝ち誇つた顔で言われたw

そんなやりとりが、なんだか心地よかつた。

今日初めてみんなと会ったのに、なんだか昔から知つてゐるみたい。

い。

「あれ、今日は長いな。」シグマがふと、つぶやいた。

「やつだね。最近じや珍しいな。」ミルも囁く。

「何が！？ 何が珍しいの？」あたしは混乱するばかりだ。

「あ～そつか。ララもわかつてへると感ひナビ……」のんきに笑うアイト。

「コトがせつめーするー。あのねえ、コトたちも、ララもねえ、元の場所にもどるのー。」

わざわざまでの人見知りは嘘のよつこ、コトリは無邪気に笑う。

…元の場所にもどる？

「ララ、俺たちは自分の意思でここへ来たり、帰ることはできない。シグマが真剣になつて言つ。

「私たちば、現実とここを行き来してゐる。驚いてやうねつ

「そつと、煙みたいにシコーンつてな」ミルヒアイトはお氣楽だ。

現実と… やつぱつ夢ではなこととを再確認した。

また、ここへ来れるの…？

あたしは質問を重ねようとしたけど、やめた。

あたしたちの周り、セレブリティや芸能人のよつなものが出てきただからだ。

「ほーら来た。…またな。」 アイトが煙で見えなくなつていいく。

「またね、みんな〜」 ミルが手をふつてぴょんぴょん跳ねる。

「ハハ、まいこになるなよ。」 人形を抱きかかえ、コトリが消える。

最後に、無言でシグマが消えた。

気がついた時には、なんてことないふつうの朝だった。  
なんだか長い夢を見ていたみたい。。。

起き上がろうとして、ハツとした。

…枕元に無造作に置かれたドーナツ。  
あーあ、シーツに油が…。しかも、ちょっとつぶれてるし…。

# 光希の仕業だな…。

怒り半分で弟の部屋へ乗り込む。

「ちょっと光希！ これなんのイタズラ？！」

「は？ しらねーよ！ 姉ちゃんがねぼけてんだろ！」

光希はホントに知らないらしい。

そもそも、朝から姉の枕元に「一ナツを置く理由もない」と、もちろん、家族の誰も知らないようだった。

ほんとうは、うすうす氣づいていた。

。 昨日の、いや、あの場所での出来事が、夢なんかじゃないってこと

結局それは、あたしの朝<sup>じ</sup>はんになつた。

なんだか、懐かしきような優しい味。

そして、学校。

古典、情報、そして今。数学なう。

「高橋せんせー！ これわかるーいーー！」

あちこちで先生を呼ぶ声が飛び交う。

「はーはー、ちょっと待ってーー」 順番だから、と笑う。

あたしは、こんなやつとりをした試しがない。

数学は苦手。

いつもテスト前に焦つてなんとかこの2年9組、またの名を普通コース選抜クラスに位置しているのだ。今まで赤点とつてないのが不思議なくらいなレベルだけど、あえて自分から質問したりはしない。たいていは窓の外を見て1時間を過ごす。

黒板に向かつて解説をする先生を見て、ふと、あの哀しげな姿を思い出した。

「玲南？」 今日の授業もずっと外見てただろーーー！」

お昼休み。 いつもの第一多目的室にて。

「あー、だつてわかんなかったし。 先生見てないじゃん。」  
思いつきついイヤミをこめて言つたし。

「やる気のない生徒は見てあげませんよ。」  
すました顔え言つ先生。

わざわざやる気ないですよ、 なんて言つませんよ。

「いじよ、べつに。」 でも、ちょっと寂しいとか思つたり…。

「！？」 先生のお弁当を見て、あたしは自分の皿を凝つた。

「ああ、これ？ って、なんでそんな驚いてんの？」  
また一口。

「い、いや、。。なんでもない、。。」 しどりせどりのあ  
たし。

だつて、先生の今日のお弁当=パンの中…

「あの」 ドーナツがあつたから…！

数あるドーナツのなかで、偶然？ いや、間違いない。

それは、ミルがくれたドーナツ そのものだつた。

そして、おもしろいものを見たと喜わんばかりに、先生は喜つた。

「…昨日は、また夢を見た？」

## “”のルール

「…えつ？」

「だから、最近不思議な夢見る～って玲南言つてたじゅん。」

「コンビニのパンに豪快にかぶりつく先生。

「そ、そだつけ～？」

「俺はな～、タブライオンに食われたんだよ～。田え覚めた時ちよ  
つとホントに怖えー！つて思つちゃつたしな（笑）」

「…く～。はは、食べられてなくてよかつたよ、、、。」

…びりくつした。 ここで夢の話来るパターンね（^――^）

本当は、ここで気付くべきだったのかもしれない。  
先生…「高搭優紀」が何者かつてことに。  
あたしは肝心なところで鈍いんだよね。。。

その日の、日本史の授業のときだった。

「え～、太閤検地は何年～に行つたかわかる人。 え～、じゃあ  
小林。」

「…わかんないです。」

「教科書に載つてゐるからそれも一つ見て。え～125ページ……。」

ぼうつとノートをとつてゐたあたしの前を、何かが通り過ぎた。  
え、何、、、？

そう思つた時、あたしを取り巻くものに気付いた。  
……煙。白い霧のような、そう、”あの場所”から去つたときの  
煙と一緒に。

しかも、あたしにしか見えていないらしい。  
その証拠に、クラスのみんなは平然と授業している。  
状況を理解し始めた時にはすでに、視界は真っ白になつていた。

……ん、あれ？

気がついたら、あたしは見覚えのある景色、あの建物の中にいた。  
木造のログハウスのような室内。  
ほんのり甘いような空気。

「帰つてきたんだ……。」

あたしの周囲には、まだ白い霧が漂つてゐる。  
制服を払おうとして、気付いた。

そういえば、あたしはあの教室で突然消えた。  
今頃、みんなが騒いでいるかも！…… わああ……やば……！

「あ、ララだ！ 来てたんだ。びつしたの、そんな慌てで。  
アイトだ。」

「あっ、あのね！？あたし授業の真っ最中に煙が…。いきなりここ  
来ちゃったし！今頃みんな騒いでるんじゃない！？ アイト、戻り  
方は！！？」

「ははっ！ ララ、落ちつけよ～（笑）」

こんな状況で落ち着けるわけないでしょっ！

「大丈夫！ 僕らのこの時間は現実と同じっちゃあ同じなんだけど、  
ここに来ている間は、向こうではほんの数秒にすぎない。きっと、  
どこかで時間自体が歪んでるんだろうな。僕もよくわかんねーけど  
さ、あっちに戻ったときはそれほど時間は進んでないんだ。あ、で  
も向こうが夜のときは違うな。なんか夜のほうが時間を消費しやす  
いらしいな。」

と、とにかく大丈夫ってことだよね、、、？

「あ、ありがと。 アイト。」

「まーまー、ララもそのうち慣れるって。  
明るく笑うアイト。

その時、部屋のあちこちのカーテンがふわあっと揺れたかと思う  
と、一瞬の間で白い煙の渦がアイトとあたしの前に現れたかと思つ  
と、手で煙をはらう人影が見えた。

「ー、ミルーーー！」

「わあ～ララ！ アイトも！ 来てたんだね～。」

あたしはミルの格好を見て驚いた。

だつて、すくきれいな服を着てたから。服というより、ステジ衣装…と言つたほうがいいかもしない。紺のサテン地のドレスに、シルバーアクセサリー。田元にはキラキラのパールシャドウ。

やつぱり、どこかで見たことがある、。

だが、15歳のミルにはちょっと大人っぽいような服装にメイク、

「この子は、誰だつけ？」

「ミル…。 その格好…。」

「あ、あ～！ 『ごめんな』。こんな姿。 着替えてくるねつー。」

慌てて奥に隠れるように消えた。

つづいて、コトリが現れた。

どこかの幼稚園のスマック。 手には黄色い通園帽子。田には涙をいっぴいためている。

「コトリちゃん、、、？」

「う、うわあ～ん！…。」 こきなり泣き出した。 びつすればいいかわかんないよ～！

あたしがうるたえていると、アイトがやつてきた。

「ビーしたのコトロ。 何があつたか？」 田線をコトリに合わせ、覗き込むアイト。

「…、コト、…、うつやくさがね、コトのねつ、コトにお砂か

「うわあん！」

涙をぽろぽろこぼしてアイトに訴える。

「そつかあ～コト、大変だつたなあ、よしよし、もうだいじょうぶ！　アイト兄ちゃんがついてるからなつ！　へーきへーき！」

笑顔でコトリを抱き上げるアイト。

この人は優しいうつて、一目でわかる。

「あ～ララ、そここのヒヨコの模様のタオル取つてくれる？」

「あ、はいビーぞ！」

「サンキュ！」　ドクロの柄の黒い靴下。ジャラジャラ音のするベルトのジーパンに黒のTシャツ。銀のスタッズが光るパーク。

一見バンドを組んでそうな格好のアイトが、幼稚園児をだっこしての画が、なんだかおかしくて笑えた。あたしを見て、アイトとコトリも笑つた。

ふと、コトリのピンクのスマックのチューリップ形の名札が目に入つた。

「もりた　ことり　裏面　「森田　琴梨」

…これが、あたしが一番最初に見た、現実の情報だった。イコール、この世界で見てはいけないもの…。

2時間くらいいたつた後、シグマが姿を現した。

シグマが来るのを待つて、5人でトラペゾイドの街に散歩に繰り出すことにした。

シグマはひどく眠そうで、受け答えもぼんやりしている。外に出ると、大きく伸びをしてコトリの手を引いた。

「この街をみんなで歩いて、気付いたことがある。

「一つ目は、この世界には子供の姿が極端に少ないこと。

そのことをシグマに聞くと、アイトに聞けー、と眠そうに言われた（（+ - +））

アイトは、「この世界は、特別だからな。」と、静かに言つたからそれ以上は聞けなかつた。

二つ目は、誰も人のことを「さん」づけしたり、本名で呼び合つのを避けていること。

そういうえば、あたしも最初からシグマのことも呼び捨てだつた。

唯一、例外はユキさんだけらしい。

三つ目は、この世界にお金の制度がないこと。

食べ物や飲み物など、みんなスーパー やコンビニで見たことのあるものばかりだけど、お店らしきところにいる人に言えばいいことになつてゐるのには驚いた。お金どこのか、郵便局や市役所などの行政施設そのものが存在しないのだ。

それはつまりこの世界の人たちみんなが、長く「ここ」に留まつていられないということ。

あたしと同じように、現実に生きている人々で、不定期にワープを繰り返しているのだ。

それがなぜなのか、あたしにはわからなかつた。

でも、一つだけ確かに言えるのは、この世界の人々はみんな、ここが好きだということ。

そして、何かとてつもなく大きくて暗い闇を抱えて逃げてきた人々だということだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9082x/>

---

trapezoid 時空を架けて

2011年11月17日17時47分発行